

## 大地震の現場から避難のためのヒッチハイク体験記

株式会社サイプレス  
代表取締役社長 伊藤雅教

当日 3 月 11 日、私と部下は仙台の公立病院の中にいた。この病院で公立病院職員向けに講演を開始して 5 分たったころに大地震が起きた。その揺れは長く、時にズドンという音とともに、突き上げるような衝撃を感じた。

講演者用の演台にいた私は、演台につかまっていたが、揺れとともに演台も激しく動き、とてもつかまっていられる状況ではなかったところに、ズドンという衝撃で体がジャンプした。その衝撃で痛めていた左ひざは、グキッという強い痛みを感じた。

またしてもズドンという衝撃とともにガラスの割れる音があちこちから聞こえる。

講演会場にはレントゲンの写真を観るためのシャーカッセンが 2 台あり、その一台を講演会場にいた職員が倒れないように抑え始めた。私の左にもシャーカッセンがあり抑え始めたが、まだ揺れは続く。

揺れが続く中、講演会場の出入り口のドアが開かないと誰かが怒鳴る。急いで別の出入り口の近くにいた誰かが、こっちのドアは開いたと怒鳴る。

講演はその場で中止。全員開いたドアから階段を下りて 1 階に下り始める。すでに電気は切れており、真っ暗に近い階段をゆっくり下りている間にも余震での強い揺れを感じる。

地震のたびに、それぞれお互いの顔を見る。本能的に自分の不安な気持ち以上に、相手も不安でいるのかを確認している自分を発見する。それはこの病院の職員が、この地震で、病院が崩壊しないほどの耐震強度を持っているかをしっているはずで、その不安度が顔に表れていると瞬時に思ったからである。

郷里の北海道ではよく地震があり、震度 5 程度の体験はしてきたが、今度のは、それを上回る。

1 階に下りてみると、薄暗い中でガラスの破片が廊下に散乱している。医師も看護師もそのほかの職員もガラスの破片の処理と、負傷者の確認を行っている。

病院の管理職の方から、東京から来たのであれば、病院内にいるほうが安全かもしれないと言われたが、余震が続く中、これから相当な患者が運び込まれることを想定すると、ここにいること自体が病院にも負担になると考え、「大丈夫です、何とか考えます」と言って、病院を出た。

病院を出ると講演会場にいたさまざまな病院の事務長が携帯で電話をしているが、つながっていない様子がない。自分も家族に電話をするが繋がらない。

病院の駐車場で知り合いの方の自動車のラジオニュースを一緒に聞いてみる。ラジオでは 4 メートル程度の津波が来る可能性があり、避難勧告が繰り返されていた。知り合いにはこの病院が海岸からどのくらい離れていて標高がどのくらいかを聞いてみた。標高はわからないが海には近

いとのこと。それなら知り合いの方の勤める会社の方が海から遠いので安全だろうとこのことで自動車に乗せてもらってその会社に向かうことにした。車中で何度電話をしてもつながらず。携帯メールを家族と会社に何十回目かにやっと送れた。携帯の電池残量が減り始めてきた。

道路はとてつもない渋滞でほとんど動かない。ラジオからは4メートルの津波が6メートルになるかもしれないと流れ始める。向かっている会社の最上階は何階かを聞いてみると、3階だとのこと。4メートルなら3階にいれば何とかなるが、7メートルなら3階はもう駄目。向かっている会社の近くにもっと高いビルがあり、話せばこんな状況なら、入れてくれるだろうと知り合いは言った。若干の安堵感。でも車は動かない。裏道を探していろいろトライするが、同じことを考えて行動する地元の人の車でどこも大渋滞のまま。

コンビニには人ばかりと長い列を発見。そういえば水と食料の確保をしないといけない。渋滞のままでは危険だと、また裏道を抜ける。しばらくすると20人くらいの列のコンビニを見つけた。コンビニで水と食料を調達するために立ち寄る。コンビニの中は足場の踏み場もないような状況で、すでに水も食料も売り切れ、飲み物とチョコレートとスナック菓子とカップラーメンを手に入れる。並んでいる間も家族に電話を入れるがつかない。電池残量はすでに半分になった。再度、渋滞の中移動を再開する。ラジオからは7メートルではなく10メートルの津波が来る可能性があるので、河川と橋からはできるだけ離れるようにと流れてくる。渋滞の中、目の前は、橋である。どこにも行けない。またこの橋を渡らなければ、向かっている会社にも行けない。覚悟を決めて、橋を渡ることにした。川はすでに茶色の泥水になっている。橋を渡っている間も、津波が来ないかどうか気が気ではない。やっと橋の端に来てみると数十センチの段差になっている、これが渋滞の原因だったのだとわかる。

町中の信号は消えたまま、右折も左折も直進もお互い譲りながら発進している。意外と人間は危機の中でも、自分勝手に行動しないものだと感じる。

通常なら15分で着く道のを2時間かけてやっと目的の会社にたどり着いた。ビル自体の外見の被害はないようだ。駐車場には社員が寒空の中集まっている。ビルの中は棚が倒れてぐちゃぐちゃになっている。このビルの向かいのビルは崩壊していて、先ほど1名ががれきの中から助け出されたとのこと。この会社の社長は出張中で連絡が取れない。災害対策本部が作られ、取締役が被害状況と社員・家族の安否を確認している。周りを見渡してみると、すぐ近くの5階建ての立体駐車場は歪んでいて、あれでは車は出せないなどと話している。近くのビルのガラスは割れており、壁にも亀裂が入っている。この被害では長期戦になるなと思う。そういえば、輪島の地震の時にも、そうだった。震災直後にボランティアに行ったが、壊滅的な被害状況だった。

寒空の中、外にいると心底体が冷えてくる。車に戻るがガソリンの残量がない。震災前に入れておくべきだったと知り合いが嘆く。ヒーターは使えない。ラジオを聞きながら状況を確認するが、これは相当な被害だと実感する。知り合いの家族との連絡もつかない。さてどうする。

営業車を借りて東京に戻れるか聞いてみるが、社員の帰宅に車が必要で借りられない。

残り少ないガソリンで知り合いのうちは向かうことにした。家族の安否を確認するためだ。途中にレンタカー店を見つけ交渉するが、システムがダウンして貸せないと断られる。2件のレンタカー店に交渉したがすべて断られた。ラジオからは新幹線も高速自動車道も使えない。仙台駅は混乱の中、ひどい状況だとニュースが流れる。800メートル先に大手のレンタカー会社があるので、そこに聞いてみたらと言われ、行ってみるが、ここでも断られた。車はあるのに貸してくれない。もう帰るすべがない。未来永劫この3社からは車を借りないと心に誓った。

そんなときに、トイレを借りに来た人が10キロ歩いてここまで来たが、あと15キロは家まで歩いて帰るつもりだという。運のいいことに知り合いの家の帰り道にその方の自宅がある。一緒に同乗して帰ることになった。

雪が降ってきた、それも吹雪だ。ヒーターは使えない。渋滞の中、大きな余震が続く。車は遊園地の乗り物のように揺れる。車の販売店のガラスが割れ始める。人が道に避難のために出てくる。寒い。

渋滞の中で、夜になった。外は真っ暗。信号もない。真っ暗の中で余震のたびに津波が来る、避難せよとラジオニュースが流れるが、どうしようもない。どこを走っているのかもわからない。真っ暗な中で月の明かりに目が慣れてくる。川にも道にも被害があり冠水している。道は遮断され迂回を余儀なくされる。帰れるのだろうかと不安がよぎる。また川と橋だ。もうどうにもならない。通るしかない。それから数時間、同乗した人を下して、やっと知り合いの自宅に着く。

連絡がつかなかった知り合いの奥さんと子供が無事だと確認できた。一安心。我々2人も急遽、泊めてもらうことになる。知り合いの方からは携帯メールで連絡していたがメールは届かず。奥さんはビックリ。誠に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

家に入るとやはりあたたかい。外とは全く違う。明りはLEDランプとろうそく。時計を見るともうすぐ21時であった。食事をすることにしたが、新築した家にはなぜかまだ水道が使えたので、トイレを貸してもらおう。ガスは止まっていて、携帯ガスコンロはなくコンビニで買ったカップラーメンは食べられない。しょうがない、チョコレートとスナック菓子の夕食とした。ウイスキーを貰って体内から温めることにした。もちろんストレートで飲む。

泊めてもらった家の長女は受験で水戸に行っており、消息が分からない。奥さんは泣いている。電話もメールもつながらないまま。ついに携帯の電池も切れてしまった。

ラジオで緊急のため公衆電話は無料で使えるようにしたとニュース。すぐに次女が自転車で公衆電話のある公民館の他、数か所を回ったが、震災で全ての公衆電話は使えなかった。余震はさらに続く、だがあの大地震を経験した後は、この程度では驚かなくなった自分に逆に驚く。

今日は起きていても電池とろうそくの無駄になる。寝ることにした。

翌朝、またの余震で目が覚めた。寝床で帰れる方法を思案する。また余震。起きて窓の外を眺めてみる。遠くの方で煙が上がっているのが数か所見える。多分、火災だ。近くの草木の揺れで風向きを確認。この近辺は大丈夫と安心する。そうしたら一緒にいた安西も起きてきた。彼は40歳、子供はまだ小さい、家族はきっと心配している。なんとか帰る方法を考えないといけない。

居間に降りていってみると、この家の家族はもうすでに起きていた。買い置きしていたパンなどが出てくる。朝ごはんです。どうぞと勧められる。この震災は長期戦だ。少量だけ頂くことにした。この家族は今ある食料だけでいつまで食いつなげるかもわからない。このまま2人が滞在することはこの家族にとって負担が大きすぎる。昨夜使えた水道も朝には断水していた。バケツに取っておくべきだった。地震の衝撃で痛めた膝には水がたまってきている。

そうだヒッチハイクの手があった。昔、学生の時にしたことがある。昨日のニュースでも国道は寸断されていると言っていた。東京までつながっているのは4号線だ。高速道路マップの地図とカレンダーを貰って、カレンダー裏にペンで「国道4号線 東京方面」と大きな字で書いてみる。この家から4号線につながる道路までどう行ったらいいかを教えてもらう。さあ出発だ。この一家が連絡をしたい親戚・家族の名前と電話番号をもらい、電話が繋がったら無事であることを伝えると約束をする。もしも水戸に受験で行っている長女に連絡が取れたら、いつか必ず迎えに行くからそのホテルにいてほしいという伝言も約束をした。奥さんは娘が心配で泣いている。

ペットボトルとお菓子を辞退したが貰ってしまった。この家族は我々のことを心配している。ヒッチハイクで帰れる確証はない。もしも途中で余震と津波が来たら命の保証もない。ヒッチハイクは危ないからあきらめるようにと説得されたがこのままではこの家族に申し訳ない。

それに安西の家族も自分の家族も心配しているはずだ。もう出発しかない。

家を出て歩こうとしたら、残り少ないガソリンで4号線まで送ってくれるという。これは長女を迎えに行けるぎりぎりの燃料しかないこの家族にとって、迎えに行くことをあきらめることを意味する。あまりにも申し訳ない。断ったが、断り切れず、好意を受けることになってしまった。

4号線に着いた。お世話になった方に、別れを告げようとするヒッチハイクできるまで心配なので待っていてくれるという。もしも乗せてくれる車がなければ、家に帰れるようにするためだ。これは急いでヒッチハイクしなければ、彼だっていつ帰宅できるのかもわからなくなる。手を挙げてヒッチハイクとわかるようにしても、ちらっと見ただけで通り過ぎていく車ばかりだ。寒い。仙台の朝はとても寒い。しばらくして1台が停まってくれた。東京方面に南下ならどこまででもいいと伝えたが、方向が違くと、この車には乗れなかった。それから何十台も乗せてくれな

い。あっ、停まってくれた。隣町の親戚の安否を確認に行く家族に隣町までならいいよと乗せてもらうことができた。大体15km程度だそうである。それでもありがたい。

震災から今までの状況を車の中でお互いに話しあう、震災状況の情報交換もしてしばらく走っていると、斜め前を走っている車のナンバーが品川ナンバーだ。クラクションを鳴らして、交差点で停まったときに例の「国道4号線 東京方面」を出して合図、窓を開けて2人ならOKかを聞いてみる。大きく首を縦に振ってくれた。やった！ 帰れるかもしれない。乗せてもらった一家にはお礼を言いながら、乗り換える。

どっと安堵感で、体中がけだるくなる。自分たちの震災からの経緯を話す。乗せてくれた方は、岩手県に衣料品の納品のために出張にきていて震災したとのこと。昨夜は一か八かで、ホテルに泊めてもらえるかを交渉したら、「電気もガスも水もないがそれでもいいかい」との回答。寝る場所の確保だけで十分と泊めてもらうことになった。翌朝は朝食も出してくれて、尚且つ、無料にしてくれたとのこと。なんとやさしい人達がいるのだろう。

さて車にはガソリンが3分の2残っているが、この量では東京まで帰れない。ガソリンスタンドを探し始める。行けども、行けどもどこも渋滞。ガソリンスタンドは被災していてどこもやっていない。3人でこの調子で隣の福島県に行ったらもしかしたらガソリンスタンドが入られるかもしれないと話す。こんなとき、こんな渋滞でガソリン消費したら仙台から数十キロも行かないうちに燃料切れになるなんて悲しくなる話は一切しない。今ここでダメでも次に希望があるという話を3人でして励ましあう。すべての交差点の信号は点いていない。大量の車がお互い譲り合うため、渋滞は解消されない。反対車線も同じ状況だ。のろのろ運転をしているとまた余震で車が大きく揺れる。ラジオからは震度と津波の危険性が流れてくる。あまりの渋滞に、ナビで迂回路を探して数百メートル移動する。また川と橋だ。崩れていて通れない。また迂回だ。小さな橋を1台1台渡っていく。こんな小さな橋に津波が来たらひとたまりもない。でも渡るしか東京に帰れる選択肢はない。橋を渡ると急に速く走れるようになる。しばらくすると都市部を抜けて、60km程度で走れるようになる。こんな感じで走れるなら夜には東京に着くかもしれないと3人で浮かれる。

何時間か走った。急に渋滞がひどくなった。片道2車線なのに左車線が動かない。右に移動する。3~4km程度進むと、原因がわかった。ガソリンスタンドだ。発電機を回して給油している。そうか、これから左車線で渋滞なら、先にガソリンスタンドがあるということだ。走りながら観る風景は、瓦屋根の家の瓦は地震で飛んでいてひどい状況だ、瓦屋根以外の家は意外と大丈夫。瓦屋根の家は地震に弱いのか。左をみると真っ黒な大きな煙が上がっている。相当大規模な火災が起きているようだ。ラジオからは有害なガスが発生しているので気を付けてくださいと流れる。でも、逃げられないのにどうしろと言うんだ、と思ってしまう。人口の多い町はどこも渋

滞でガソリンスタンドはせいぜいやっけて 1 件。コンビニは長蛇の列。食堂やレストランもどこもやっけていない。

そういえば朝もそんなに食べていなく、水しか飲んでこなかった。次第に空腹感が大きくなってきた。また何時間か走ると山の中になぜかラーメン屋に何台も車が止まっている。やっけてるらしい。店に入ると長蛇の列。少し先にもう一件のラーメン屋もやっけてるようだ。歩いて行ってみる。入れた。こんなときにこんな場所でラーメン。期待はしてなかったが結構おいしい。生き返ったような気持ちになる。食べ終わるとすぐに出発。

走り始めると福島原発のニュースが流れる。ナビにはひっきりなしに避難のメッセージが流れる。原発の場所が分からない。避難してくださいというニュースの町名を地図で探してみると海岸の方だ、幸い 4 号線は結構離れている。ただし、どの程度のリスクがこの場所でもあるのかわからない。福島県を避けて日本海方面に方向を変えるかを 3 人で相談する。山の中を走らないと抜けられない。今までも冠水や陥没、橋の損傷で通れない箇所は何か所もあった。山の中で余震、がけ崩れ、ガソリン切れになると凍死する。結局、4 号線を進むしかないと覚悟を決めた。ニュースを必死で聞く。もうどうにでもなれ、破れかぶれだ。渋滞も迂回ももう気にならない。また山の中だ、ガソリンはどんどん減っている。走っていると急に渋滞になった。そうだガソリンが入れられるかも知れない。並んでみる。30 分程度すると先にガソリンスタンドの看板が見える。動かないので歩いて行ってみると、発電機で給油できるようになっていた。ただし 1 台につき 20 リットルのみ販売。3000 円だ。100 台以上並んでいるが給油できそうか聞いてみると、多分大丈夫だとのこと。事務所は地盤沈下で使えなくなっている。福島原発の避難勧告の中、販売してくれている。ありがたい。これなら待つしかない。やっけて給油でき、これでこの先、給油がなくても東京までは帰れる。がぜん元気がでる。

もう夜になった。周りは真っ暗のまま。ひたすら走る。電話が通じたと乗せてくれた人が言った。そうだ仙台にお世話になった方の長女の安否確認をしなければならぬ。PC のバッテリーに携帯を接続して電話をかけてみる。何十回目かにつながった。長女は無事だった。家族は無事だと伝える。安心した模様。東京のおじいさんから電話があつて話したとのこと。早速おじいさんにも電話で全員の無事を伝える。それから仙台に電話を百回してもつながらぬ。緊急伝言番号に伝言メッセージを残そうとするがつながらぬ。何十回目かにつながって伝言を残した。そんなときに仙台でお世話になった方の会社の社長から電話があつた。こちらは大丈夫ですと答え、静岡に出張中だった社長は飛行機で移動して車で山形まで戻ってきて、仙台に向かう途中とのこと。安否の情報を伝えてもらえるように言ったところで電話は切れてしまった。

それから何時間も走って栃木県に入るとたまに電気がついているところがみえる。電気は人を安心させる。また余震が続く中、何時間か走る。埼玉県に入った。もう大丈夫だ。どこか近くの駅で降りしてもらい電車に乗って帰ることを話し合う。ニュースで運転している路線を確認する。都内に近くなった最寄りの駅で降りしてもらい。乗せてもらった方に別れを告げる。それから何

回かの乗り継ぎをして家に帰った。新浦安の駅は液状化現象で地盤沈下と亀裂と泥で無残な状況だった。妻は私と連絡が取れず、北海道の母も心配で眠れなかったと言っている。

やっと帰れたと安心したらどっと疲れが出てきた。断水していて食事が無い。バナナを食べて寝た。

人間、極限の状況になると何とか励ましあい、協力し合って何とかなるものである。きっと復興も何とかなると思いたい。あの惨状を観てきた自分にとって仙台でお世話になった方に何百回電話をしてもつながらない。電気を使うものは役に立たないをつくづく思う。

ボランティア支援に仙台に戻ろうと物資を買いに行ったが、売り切れていて買えない。ガソリンも手に入らない。家族からは危ないから戻らないでと、懇願される。数日後、お世話になった方に電話で連絡がついた。仙台でもガソリンが手に入らない。支援の気持ちだけありがたく頂きますとのこと。そのあと仙台の友人や東北地区にいる親戚に連絡がとれた。一応、全員無事であった。

家族で募金をして教会に行き祈る。震災直後、物資は届いてもいきわたらない。募金も直後は金額が集まるが、しばらくすると集まらなくなる。新潟や輪島の震災ではそうだった。

ライフラインが復旧してからが本当の復興だ。必要な支援も変わってくる。私が住む千葉県浦安市も大きな被害を受けている。でもここはまだましな状況だ。落ち着いたらまたボランティア支援に行くつもりだ。